

### 第3章 変化・授業タイプ・学習レリバンス

#### 1. 問題の設定

これまで、日本の教育社会学研究において、政策科学的研究の重要性がたびたび指摘されてきた。しかし、過去において提唱され、実際に行われた研究の多くは、統計的シミュレーションなどを用いて将来予測を行うことで、政策の立案に貢献しようとするものが多かった。

政策科学的研究には、もう一つの役割がある。実施された政策が、どのような成果をもたらし、いかなる意図せざる副作用を生み出したかという、政策評価に重点を置いた研究である。しかし、政策評価研究は十分に行われてきたとは言い難い。とりわけ、本研究が焦点を当てる、「授業レベル」での教育改革を迫る政策課題については、その評価を実証的に行おうとする試みは、ほとんど行われていない。なかでも、児童生徒の学業達成を測定したデータを用いて、教育改革のもとで変化が予想される学習状況と学業達成との関係に焦点付けた研究は、矢継ぎ早に教育改革が実施に移される現状においてその重要性が高まっているにもかかわらず、ほとんど行われていない。

他方で、学校週五日制や「総合的な学習の時間」などを盛り込んだ新学習指導要領の実施と前後して、教育改革が、実際にどのように教育を改善できるのか、あるいは新たな問題を引き起こすのかについての議論が広がっている。「学力低下論争」と呼ばれるものが、そうした議論をリードしてきたように見えるが、その多くは、学校五日制に伴う授業時数の減少や教育内容の削減といった、いわば教授・学習の「量的側面」に注目する議論がほとんどであった。しかも、「学力低下」への賛否にかかわらず、一部の例外を除いて、実証的な研究をふまえた議論はごく少数にとどまる。それに対し本研究は、教育改革に含まれる授業や学習の「質的側面」の変化に着目し、その影響を実証的にとらえようとする試みである。

90年代初頭の「新しい学力観」の導入以来、この十年近くにわたる教育改革は、授業レベルでの授業観・学習観に大きな変更を迫るものであった。義務教育段階、とりわけ小学校段階では、生活科の導入や体験学習の広がりに見られるように、また、今回の学習指導要領の骨格を決めた教育課程審議会も認めたように、「新しい学力観に立った教育が展開している」といわれる。

にもかかわらず、いまだに児童生徒の学習が「受け身で覚えることは得意だが、自ら調べ判断し、自分なりに考えをもちそれを表現する力が十分に育っていない」（教育課程審議

会答申、1998)との認識に基づき、今回の改訂では、さらに学習者の体験や活動を重視した「総合的な学習の時間」が正式な時間枠として、小学3年生から高校生にまで導入されることになった。そこでは、子どもたちの興味・関心の喚起を重視し、「自ら学び、自ら考える力」＝「生きる力」の育成を目指した授業観・学習観に立つ教育が、より一層求められている。ちなみに、こうした「生きる力」の教育が、新学力観の延長線上に位置づくことは、すでに専門家や文部科学省の担当者の認めるところでもある(苅谷 2002)。

このようにみると、教育改革の問題は、たんに授業時数や教育内容の削減といった量の問題にとどまらず、授業や学習のあり方に大きな変更を加える質的变化を含んでいる、といえる。こうした授業レベルでの教育改革は、子どもたちの学習のあり方、学習への意味づけ(「学習レリバンズ」と呼ぶ; 詳細は後述)、さらには学習の成果に、どのような影響を及ぼしているのだろうか。知識の伝達を重視した授業から、体験や活動、「調べ学習」や児童生徒による発表などを取り入れた授業に重点をシフトさせることで、子どもたちの学習のあり方はどのような影響を受けるのか。

本章は、現在進行中の教育改革が、授業や学習に質的变化をもたらすものであるとの認識に立ち、小中学校における授業のあり方や、児童生徒の授業への取り組みや意味づけに焦点を当て、学業達成(アカデミック・アチーブメント)の構造を明らかにしようとするものである。小中学生の学習のあり方や意味づけの違いは、学習の成果が生み出される「達成」のプロセスに、どのように影響を及ぼしているのかを、学習到達度調査と質問紙調査を用いて集められたデータを分析することによって、実証的に明らかにしようとする。

具体的には、本章では、次の3つの問いに解答を与えようとするものである。

1) 新しい学力観の導入以前と以後とを比べると、小中学生の学業達成には、どのような変化が生じているのか。また、その変化は、通塾の有無や学校外での学習時間などの学習状況とどのように関係しているのか。

2) 小中学校における授業のあり方は、どのように類型化できるのか。知識伝達を重視する伝統的な教授・学習のあり方と、子どもたちの活動や発表などを重視する新学力観的な授業・学習のあり方とは、どのように組み合わせられ、授業のタイプを構成しているのか。また、こうした授業・学習のあり方の違いによって、学業達成にどのような違いが生じるのか。

3) 児童生徒たちの学習への意味づけ(学習レリバンズ)の構造は、どのように構成されているのか。また、その構造に影響を与えているのは、いかなる要因なのか。さらには、学習レリバンズの違いによって、学業達成にどのような違いが生じるのか。